

古代土器製塩 一つの方法

日本先史古代研究会 会員 松浦宣秀

蒲刈町は広島県呉市の最東端に位置し、対岸に豊田郡川尻町、東には豊島、西は朝鮮通信使の寄港地として知られる下蒲刈町に接し、大浦・宮盛・田戸・向の集落からなる大小9島で構成されている。

蒲刈町の歴史は古く、約23,000年前から江戸時代までの遺跡が数十箇所ある。1982年に海浜で一片の土器を採取した。これは古墳時代前半代（約1,500年前）製塩土器の底であった。

1983年に「県民の浜」として開発されることになり注目していたところ、製塩土器が出たので緊急発掘を行った。その結果、古墳時代から中世に至る製塩遺構が出土した。古代の土器による製塩法は謎であったので研究を始めた。古代に藻塩あったことは、万葉集や古今集等に369首ちかくあるが、製塩方法は歌われていない。古文書にもあまりはっきりしたものはない。ただ、万葉集に2～3首玉藻を利用したことが詠まれている。「・・・朝風に玉藻かりつつ夕風に藻塩焼きつつ・・・」塩づくりに玉藻（玉のついているホンダワラ系）を使ったとあることから、ホンダワラを利用して研究した。

研究を進める上に必要な実験の作業がある。最低次のような作業である。①藻の採取 ②藻の乾燥保存 ③土器製作 ④土器の素焼き ⑤炉用石集め ⑥石敷炉づくり ⑦燃料集め ⑧濃縮 ⑨藻焼き ⑩上澄み採り ⑪煮つめる 大変な作業であるが7年間一人で行っていた。1989年（平成元年）、藻の採取や煮つめるなどの作業を手伝う会を、関心のある人の呼びかけによって「藻塩の会」が結成された。作業をしてくれたので、楽に研究ができた。藻塩そのものは会結成後2回目の実験で完成した。要するに、カメにためた海水の水分を取れば濃度があがる。天日に干してすぐ乾くホンダワラを海水に浸して干すと早く水分が蒸発して塩分だけが藻に残る。これをカメの中の海水に浸して洗う。そしてまた乾かす。これを繰り返せば、水分が早くなくなってカメの中の海水は3日間で濃くなる。同時に藻の成分のグルタミン酸なども溶け込むので「うま味」がある。濃縮に利用した藻にも、濃い塩分が残るので、乾燥させて焼く（藻塩焼く）と炭と灰、ヨウドと塩の結晶ができる。この塩の結晶をとるために、先のカメにできた濃縮液に炭ごと全部入れ、かき混ぜて布越しする。布目を通ったものを一晚ねかせ、沈殿させた、上澄液を土器で煮詰めてつくった塩を藻塩という。藻の成分が溶け込んでいるのでうま味のある茶色（藻の色）の塩である。焼いた藻の炭をいれたために活性炭の働きをして、苦味を取り、まろやかな塩ができた。現在、古代の一つの方法として、この方法で塩がつくられていたのではないかと学会でいわれるようになってきている。最近、製塩遺跡から藻を焼いた灰が出土してきている。沖浦遺跡出土の製塩土器から藻につく珪藻の遺体や藻を焼いた灰などが見つかった。



ホンダワラを焼く煙

万葉集の巻7の一節

「志賀の海人の・・・藻塩焼く煙 風をいたみ たちは上がらず 山になびく」はこの煙



土器の中にできた藻塩

その後「藻塩の会」は作業から得たものを生かし、修学旅行生をはじめ多くの人々に「古代塩づくり」の体験指導をするに至り、蒲刈町を大いにアピールすることになった。

その後この藻塩は、「海人の藻塩」として商品化され町の産業になった。今や有名ブランドとして全国に知られるようになっていく。1983年古代製塩遺跡発掘終了の時、発掘した遺跡を将来屋根で覆い見学できるようにしたいと念願し提案した。当初は夢物語と一笑されていたが、2000年広島県知事にこの夢を話したところ、トントン拍子に話がまとまり、2003年5月、念願の「蒲刈古代製塩遺跡復元展示館」がオープンした。遺跡発掘現場と出土土器を展示したものと、タッチパネル方式で遺跡や古代塩づくりなどを学ぶことのできるビデオ室を完備したものができ、展示館で古代の学習をして塩づくりの体験を行っている。どんな体験であっても、その歴史文化などの学習をしてこそ初めて体験が活きてくるのである。

松浦さんとの出会いと顧問就任の経緯

当会会長 若狭哲六

松浦さんを当会の顧問にお願いした理由は、先生が20数年前よりご自分の住んでおられる島に、ペトログラフィ的刻文字の存在を確認しておられた頃に、広島市の「広島ホームテレビ」が、巨石文化についての取材に、私（若狭）が、その頃、加茂川町にシュメール文字が石に刻まれていることで、小著を出していた頃と重なり、広島ホームテレビより案内があり、私が広島の宮島での取材されていた頃、同島で知り合った方です。

松浦氏は、後でわかったのですが、その頃すでに、呉市の蒲刈の砂浜に、古代の塩作りの遺跡を発見されていたのです。久しぶりに先生と連絡をとったところ、先生は現在「内閣府 地球活性化伝道師・広島県文化財協会理事・広島県立歴史博物館友の会理事」をなさっておられる故、私としましては、当研究会に顧問としてお願いしました次第です。松浦さまとは知り合いになってから22年になります。